

2026年6月21日 説教「子どものように」

ルカの福音書 18 章 15～17 節

先週は 9～14 節を通して、パリサイ人と取税人の祈りを対比するたとえ話を通して、イエスは義と認められたのは取税人だと教えられた記事から学びました。今朝は実際の出来事の記事です。

1. イエスのみ許に来た親子たち (15 節)

① さわっていただくために (15) 「イエスにさわっていただくとして、」

イエス・キリストにさわっていただくとはどのような意味があるのでしょうか。そうしていただくことによって病気が癒されることが多々ありました。ルカは医者でしたから、イエスの癒しには関心があったでしょう。病人たちに手を置いていやされたこと (4:40)、ツァラアトに冒された人が癒されたこと (5:13)、腰が曲がって伸ばせない女性に手を置き癒されたこと (13:13) がありました。また、12 年長血をわずらった女はイエスの着物のふさにさわって癒されました (8:44)。人々がイエスにさわろうとしたのは、大きな力がそこから出て癒されたからです (6:19)。しかし、今朝の聖書箇所では、人々がさわっていただくとしたのは、「祝福をしよう」という目的があったと考えられます。

② 幼子たちをみもとに (15) 「人々がその幼子たちを、みもとに連れてきた。」

人々がイエスのみもとに連れて来たのは幼子たちでした。新共同訳では「乳飲み子」とありますが、もう少し上の子供達もいたと想定されますから「幼子」として良いと思われます。ともかく、人々は家族の祝福をいただきたいと願っていたのです。十戒の第五戒は「あなたの父と母を敬え」ですが、これは家族を大切にすることを教えてくれています (ウェストミンスター大教理問答 125、6)。親は、幼子たちの歩みが守られ、将来が祝福されることを願ってイエスの所に来たのは自然な導きでした。ことに、子どもたちの霊的祝福を願ったからこそ、イエスの所に彼らはやってきたと思われます。

③ 弟子達はしかり (15) 「ところが、弟子たちはそれを見てしかった。」

ところが、イエスの弟子達にはその状況を受け入れられませんでした。ここは、親子がやって来る所ではない。イエスさまが困っている人達のために働かれている最中だ。話されている内容も親子の問題とは関係がないのだから、あっちに行っていなさいというところでしょうか。そんなことから、弟子達は親子たちをしかったのです。

2. 親子を受け入れたイエス (16 節)

① イエスは幼子達を (16) 「しかし、イエスは、幼子たちを呼び寄せて、」

ところが、イエスのご対応は、弟子達とは異なりました。幼子たちを厄介者のようにはしませんでした。むしろ、子どもたちを呼び寄せたのです。つまり、弟子達にしかられて、少し後ずさりしていた親子を、イエスは積極的にご自分のところに引き寄せられたのです。ある面では、日常的な出来事でありましたが、イエスは小さな事に見えることのなかの、重要なことを見逃されずにお教えなさろうとしているのです。

②子どもたちを来させよ (16)「**こう言われた。『子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。』**」

イエスは事柄をよく認識していない幼子や少し年上の子どもたちを覚えてつつ、「子どもたちをわたしのところに来させなさい」と言われました。小さい者たちを全面的に受け入れているご発言です。「わたしのところに」というお言葉には、手を広げてお受け入れくださるイエスのお心を知ることができます。そして、「止めてはいけません」というご注意は、主の聖なる憤りが含まれています(マルコ 10:14 参照)。

③神の国は (16)「**『神の国は、このような者たちのものです』**」

主イエスが幼き者たちを、お招きになったのはどうしてでしょう。それは「神の国は、このような者たちのものです」というお言葉にある通りです。すなわち、弟子達には子ども、まして幼子に至っては、相手にするような存在ではないと思っていました。もちろん、彼らも子どもはかわいいと思ったでしょうが、イエス様と直接に関わるような者達ではないととらえていたのです。

3. 子どものように神の国を (17 節)

①まことに告げます (17)「**『まことに、あなたがたに告げます。』**」

「まことに」という言葉は原語のギリシャ語では「アーメン」という、私たちにとてもなじみのある言葉です。イエス・キリストが大切なことを言われる時に、よくこの言葉が使われます。「真実に」といった意味です。これから伝えることには、忘れないようにしっかりと聞きなさいということです。

②子どものように (17)「**『子どものように神の国を受け入れる者でなければ』**」

「子どものように受け入れる」については、興味深い解釈がある。「幼子の態度の第一は、ものを平然と受け取る能力、当然のようにして贈り物を受け取る態度である。第二には、平然と戻ることにある。幼子はたとえ親から叱られても夕方には当然のように我が家に帰ってきて、親子の関係を疑わない」(榊原康夫師)とある。なんのこだわりもなくもらう心、親から叱られても根に持つようなことがない心。こうした心は子どもこそであり、大人になると、さまざまなこだわりが心の中にあって、なかなか素直になれなくなる。場合によっては何十年もこだわるのが大人ではないでしょうか。子どものような心を持って神の国を受け入れることの重要性がのべられています。

③入ることは出来ない (17)「**『決してそこに、入ることはできません。』**」

気を付けて読みたいのは、「子どものように神の国を受け入れる者でなければ」、「決してそこに、入ることは出来ません」とあることです。つまり、大人のなかにある小賢しい心、経験に基づく人間的判断、専らご利益を求め、自らの体力・知力にすぎる思い、また前のたとえ話のパリサイ人のように自らを義とする心では、神の国に入ることはできないのです。それでは、年を進めた者たちには神の国に入れないのでしょうか。あのニコデモはそれなりの年齢でした(ヨハネ 3 章)。しかし、彼はある面では子どものように、イエスさまのところに出てきたのです。そこに道は用意されていました。

《結論》今朝の聖書箇所、イエスのところに連れてこられたのは、幼子であったとあります。この幼子とは赤子と言ってもよいです。これからの成長の祝福の祈りを求めて、親達はそこにやってきたのでしょう。しかし、その親には幼児だけではなく、兄弟たちもいたことでしょう。イエスが「子どもたちをわたしのところに来させなさい」と言っておられるのは、一般的に子どもについて話しておられると考えられます。マタイの福音書やマルコの福音書では、幼子という言葉は出てきません。子どもたちとなっています。イエスは子どもたち全体のことを念頭において、話されたと考えられます。そこで、以下でも、幼児だけではなく、「子ども」という大きなくりで考えていきます。

さて、ここに出てくる「子どものように」ということについて、もう少し考えてみましょう。「子どものように」というのは、子ども達に潜む未知の力を言っているのでしょうか。あるいは、前例にとられない心のことを言っているのでしょうか。それもあるでしょう。しかし、そういうことならば、大人にも創造力のある人がたくさんいます。また、「子どものように」を、子どもたちの道徳的な純朴性を言っているのというのもあたっていないでしょう。私は小さい頃、姉に連れられて、近くの教会の日曜学校に通い始めました。学校でもそれなりに良い子でした。でも小学 4 年生頃、友人に誘われて、何度か万引きなどの悪さをするような、裏表のある子どもでした。子供ながらにその悪さ(罪)に悩んでいましたが、福音は魂に届いていませんでした。あの時に、その罪をそのまま神の前に告白することを教えられ、赦しを経験していれば、子どもながらに救いの確信が与えられていたかもしれません。ともあれ、こうした小さな事例のなかに、子どもが無垢であるとはとても言えないということが証明されると思います。子供間のいじめ問題などからしても、それは明らかです。

それでは、「子どものように」とはどのような意味なのでしょう。イエス様は病氣の人、貧しい人、罪人と言われる人達に、深い慈しみをかけられました。イエス様はこうした人々について、「最も小さい者たち」(マタイ 25:40)という表現をされました。そういう面から考えると、子供たちにも、「最も小さい者たち」のなかに入っているのではないのでしょうか。つまり、罪人も病氣の人も貧しい人も子供も、自分勝手という面では変わりません。でも彼らは弱く、守りや助けが必要でした。そして彼らには概して、人目など気にせず、あれこれ考えずにイエス様を慕い求める心と罪を認める砕かれた心がありました。まさに子どものような心です。直前に学んだたとえ話に出てきた取税人もそうでした。

その後、主は子供たちを抱き、手を置いて祝福されたことがマルコの福音書には記されています。そこには親のことは記されていませんが、彼らへの配慮も示されたと思われます。最後に覚えたいことは、すべからず人は、弱く小さい存在だということです。ところが、弟子達がそうであったように、長年の信仰者や弟子でも、自らの力や経験を過信しやすいのです。大人は子供を見るときに、教育指導の心だけでなく、自らの弱さ、そして罪にも心を向けましょう。それを祈り、神の恵みにあずかりましょう。そこに、神の国の園が見えてくるのです。子供のように、そのまま、イエスさまの前に出ていこうではありませんか。